

早春賦

暮れなずむ時刻の空には、いつの季節でも朱色や金色の明るい夕焼けがあつてほしいけれど、厳冬の正月なら蒼い水底に沈むように冷たく暗くなつていくのもそれほど悪くはない。すぐそこに明るい春が来ているのが判つているから。

冬至の頃は五時にはとつぷり暮れていたが、それから三週間しか経つてないのに、今日など、昼間の明るさがそこいらにまだ残つていようになつた。

この感じは微かながら春の気配だと思ひながら、藤沢から鎌倉へ車を走らせている。頭は熱いが気持ち沈んでいる。善行で一時間半ばかり主婦を口説いていた。

三月には開院することになつてゐる医院に、まだ看護婦さんが決まらない。面接、というよりも拝み倒しに近い勧誘は今日で四人め。断られる理由は概ねきまつていて、今の勤め先を辞める気はない、私は良いが主人が反対する、子供が学校から帰つた時家に居てやりたい、近く年寄りが同居する予定なので、などなど。

今日のMさんとは十年前、同じ病院で一緒に働いていた。彼女が家庭にひきこもつてからは年賀状のやりとりだけが續いていた。今、自宅近くの花屋でアルバイトをしているという。花売り娘ならぬ、自称「花売りおばさん」を四年続けることが出来たのは、仕事がかく楽だからだそう。花売りを手伝い始めてこんなに気楽な仕事があつたのかとうきうきしたという。

確かに責任感の強い、優秀な看護婦さんだつたからそういう彼女の実感はほんとうだろうと理解出来る。それをまたキツイ仕事に引つ張り出そうというのだから、よほど弁舌がないか、とこちらもつい一生懸命になつて、無責任で結構、気楽で結構と、そこまではいわぬまでも、訥弁を振るつて仕事をバラ色に描こうとしてみる。が、無理だよな。

主人と娘は賛成、小学校六年の息子は反対、当の本人は自信がないとのこと。例によつて考えておきますということになつた。大抵の場合、こうなる。

考えておくというのは婉曲な、しかし紛れもない拒絶なだけけれど、今日の場合はほんとは考えて見てくれるのじゃないかな、と思わせる感触がある。いつもそれで裏切られるのではあるけれど。

慣れない勧誘で疲れた。もういい加減で快諾してくれる相手に会えないものかと思いつつ車を転がしている。